

# 東大寺における中性院伝来襖下張り文書調査

三輪 眞嗣

平成 25 年度から、東大寺の塔頭中性院に伝来した襖の下張り文書の調査をおこなってきた。この調査は、「(基盤研究 B) 東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復元的研究」(代表吉川聡)の研究分担者である横内裕人(京都府立大学准教授)を中心に、京都府立大学で中世史・近世史を専攻する学部生・大学院生が参加している。調査の対象となる襖はすべて 38 面あり、これらに 1～38 までの番号を付し、順に調査を進めているが、現在のところすべての文書を取り出し終えているのは 4 面分のみである。襖が作成された時期は不明であるが、下張文書のなかには中世文書が数点存在し、近世をかなり遡る文書もあると思われる。やはり特筆すべきは中世文書が含まれることで、鎌倉時代のものから戦国期の年号を持つものがあり、個々の史料の内容もさることながら、下張り文書群としても貴重な事例である。ここでは例として鎌倉時代、永仁四年(1296)の文書を写真 1 に掲げた。東大寺領として著名な伊賀国黒田荘内の畠地の寄進に関するものであるが、関連史料の少ない法華堂通夜衆が阿弥陀経の転読をおこなっていたこともわかり、彼らの宗教活動を見るうえでも重要な史料である。これら中世文書を含めた文書群の全体像は今後の調査で明らかになろう。以下では、本年度の調査で解体作業と目録作成を進めるうちに明らかになったことを記し、本調査の中間報告に代えたい。

まず、平成 28 年度以前の作業をふり返ったうえで、本格的な調査を開始した本年度(28 年度)の調査概要を報告する。

調査が開始された平成 25 年度 7 月から、月一回程度の調査をおこなってきた。まずは集中的にすべての襖の縁と引手を取り外し、次に 1 面から順に下地骨(木製の木枠)から下張りを外す作業をしておこなってきた。倉又式噴霧器を用い、襖全体を軽く湿らせてから、竹べらを使って下地骨から外していった。この時、墨書のない表紙や上浮け・下浮けの泥真似合紙も剥がし、下張り文書が露出する状態にしている。特に下地骨に直接貼られている部分(骨縛り)は糊がきつく、水を含ませた筆で少しずつ湿らせながらの剥離作業となり、この過程で時間を要することになった。平成 28 年度までに 38 面すべてを外し終え、今年度からは下張文書の解体と文書一点毎の目録を作成している。

本年度は 1 面から 4 面の調査に着手した。これらは調査当初より文書同士が剥がされ、解体されていたもので、下張の原状の復原は困難である。まずはこれらの文書の目録を作成し、以後、5 面以降から本格的な解体調査を進めていくという方針を立てた。一面分の文書は大量にあるため、本年度は対象を内容が比較的まとまっている 2 面に限定して調査を進めてきた。

2 面の下張文書を通覧したところ、近世の売掛覚が大半であった。なかには綴じ穴や形状からも横帳であったものの綴じ紐が外れたと思われる文書もある。これらの売掛覚には宛所に「もち屋」「ます屋」が多く確認できたので、目録作成の前段階として、共通する宛所ごとに文

書をまとめ、さらに料紙や筆跡、継ぎ目などから前後関係を復原した上で、複数の括に分けていった。括は全部で27括ある。ただし、料紙や筆跡は類似したものが多く同定が困難であり、継ぎ目もほとんどが合わないため、次の面からは宛所もしくは内容による区分のみに絞り、この行程を省略する可能性もある。こうしてある程度の復原を試みた上で、一紙毎にラベルを貼り、仮番号を付した。たとえば「2（面）-1（括）-1（小番号）」といった具合である。その後、小番号一点毎にPC上で目録を採っていった。項目としては文書名・欠損・形状・紙数・法量・差出・宛所・年月日・文頭年月日・文頭（一行分）・備考を立てている。上記項目のうち注記すべきものとして、法量は前後関係を確定するために縦法量のみを採っているが、ほとんどが下張に転用する際に裁断されたと思われ、過半数が15cm前後であり、次いで11cm前後が多い。文頭年月日の項目では、文書同士の前後関係を確定のために売掛覚の最初に記された年月日を採用している。備考では目録作成過程で前後関係が判明したものを注記し、また売掛の内容として「生地関係（かのこ・りんす）」や「金物関係（小刀・剃刀）」というように品目を示し、さらに墨線による抹消がある場合はその旨を記している。なお、墨書が二行以下で、年月日や差出・宛所がないものを断簡としているが、目録を採る過程でも断簡との照合をおこない、数点は他文書との前後関係を復原することができた。

以上の作業から明らかになってきたことを述べる。2面の下張に使われている文書は大まかにいって三群ある。一つは中世文書群で、永正五年（1508）の年号を持つものが発見された。おそらく中世東大寺の堂衆方の文書群と察せられる。法華堂領が所在した摂津国長洲荘に関するもので、中世後期の堂衆関係史料として貴重なものである。これら中世文書は他面にも存在するので、別の機会にまとめて史料紹介をおこなう予定である。次は、近世の東大寺関係文書である。東大寺塔頭の中性院・仏生院の「文化六年早稲下見帳」や「慶応二年野辺帳」など所領に関する帳簿類が目玉を引くが、なかには堂衆方の日記と思しき冊子の断簡も紛れ込んでいる。総じて東大寺の堂衆方の文書類が多いと考えられる。最後は、下張を作成した表具師のもとに集められたと考えられる文書群で、これが2面文書の大半を占めている。このなかには「餅屋（もち屋）」「ます屋」などの屋号、「惣次郎（宗次郎・惣二郎・宗二郎）」「惣十郎（宗十郎）」などの人名が多数見られ、他にも「かぢ屋」「いせ屋」「八わた屋」「ちきり屋」といった屋号が見られるが、互いの関係などは明らかにしえない。今後の調査で人物関係や居住地などが判明する可能性はあるものの、これらは基本的に表具師のもとに集積された文書群と考えられ、東大寺との直接的な関係を示す文書は未見である。

以上のように、2面の下張文書の大半は東大寺と直接関係のない文書と判断されるが、逆にいえば、表具師の手元にあった文書に、下張の紙を補充するために東大寺中性院の文書が加えられて、2面の下張が作られたと考えられ、下張そのものの作成過程、文書の集積過程を知ることができる事例ともいえる。2面の目録は、表具師関係の文書が終了しただけであり、次年度からは東大寺関係文書、中世文書の目録作成に入っていく。帳簿の年代が特定できれば、下張の作成年代も推測できるだろう。

以上が本年度の調査報告である。最後に今後の展望を示しておく。平成30年度までの中期的な計画としては、2面の目録が完成次第、売掛覚が多く含まれ2面と内容が類似している1面、東大寺以外の近世寺院関係文書がまとまっている4面、東大寺関係文書（中性院関係の帳簿

類が大半) および中世文書から成る3面の順で調査を進めていく。これと同時並行で、史料紹介を目標として中世文書の調査を進めていく予定である。平成30年度以降は本格的な解体調査に入っていく。量も膨大で、解体・目録作成ともに困難が予想されるが、これまでの試行錯誤を糧として、より効率的な調査をおこなっていききたい。

なお、本調査をおこなうにあたってご高配を賜りました中性院北河原公敬師・坂東俊彦氏・納田敬吾氏をはじめ東大寺図書館の皆さまに末筆ながら御礼申し上げます。

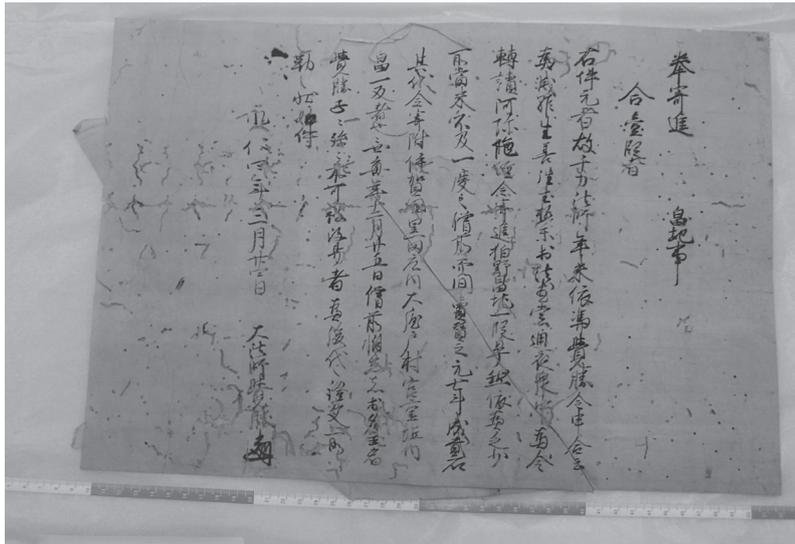


写真1 永仁四年大法師覺勝畠地寄進状



写真2 調査風景 (ラベル貼り) (東大寺)